13　「おくのほそ道」松尾芭蕉 ─近世の俳諧紀行文

19年度　明治大学

★　次の文章を読んで、後の問に答えよ。

　やうやうがかくれて、があらはる。あさむづの橋をわたりて、玉江のは穂にイにけり。鶯の関を過て峠をれば、が、にをて、十四日の夕ぐれ敦賀の津に宿をもとむ。ａその夜、月にたり。「あすの夜も１かくあるべきにや」といへば、「の習ひ、なほのはかりがたし」と、あるじに酒すすめｂられて、のにす。仲哀天皇の也。神さびて、松の木の間に月のもりたる、御前の霜をるがｃごとし。「、遊行二世の大願発起の事ありて、みづから草を、土石をひをかわかせて、参詣往来のなし。今にたえず、２神前にをひ給ふ。これを遊行のと申しＡ侍る」と、亭主のかたりける。

　　月　清　し　遊　行　の　も　て　ロる　砂　の　上

十五日、亭主のにたがはず雨降る。

　　３名　月　や　４　　　　　な　き

　十六日、空晴たれば、ますほの小貝ひろはｄんと、のに舟をす。海上七里あり。といふもの、・など５こまやかにしたためさせ、あまた舟にとりのせて、追風時のまにハぬ。濱はわづかなるの小家ニにて、しきあり。ここに茶を飲み酒をあたためて、夕ぐれのさびしさＢ感にホたり。

〔註〕

　○社頭……神社の前。神社のあたり。

　○遊行二世の上人……一遍上人のあとを継いだ弟子、上人のこと。

　○泥渟……泥と水溜まりのこと。

問１　二重傍線部イ～ホの助動詞のうち、一つだけ意味の異なるものがある。その記号を次の中から選べ。

　　Ａ　イ　　Ｂ　ロ　　Ｃ　ハ　　Ｄ　ニ　　Ｅ　ホ

問２　傍線部１「かくあるべきにや」の解釈として最も適切なものを次の中から一つ選べ。

Ａ　このような宿に泊まれるだろうか

Ｂ　今晩の月のように美しいだろう

Ｃ　今晩のような月が見られるだろうか

Ｄ　今日のように晴れわたるはずだ

Ｅ　今宵のように酒を酌み交わしたいものだ

問３　傍線部２「神前に真砂を荷ひ給ふ」とあるが、これは誰の行いを指すものか。最も適切なものを次の中から一つ選べ。

　　Ａ　宿のあるじ　　　　Ｂ　気比の明神　　　　Ｃ　仲哀天皇

　　Ｄ　遊行二世の上人　　Ｅ　代々の遊行上人

問４　本文中の俳句、「月清し遊行のもてる砂の上」の季語と季節を書け。

　　季語＝［　　　　　　　　　　　　　　　］

　　季節＝［　　　　　　　　　　　　　　　］

問５　傍線部３「名月や」に込められた作者の心情はどのようなものか。最も適切なものを次の中から一つ選べ。

Ａ　長い旅を経てきた後の一瞬の安らぎを、名月に求める気持ち

Ｂ　亭主のことば通り、名月が見られなかったことに感心する気持ち

Ｃ　名月を見るために日取りをよく考えるべきだったと悔いる気持ち

Ｄ　楽しみにしていた名月を見ることができなかったという残念な気持ち

Ｅ　雨上がりに思いがけず名月を見ることができたという喜びの気持ち

問６　傍線部４「北國日和定なき」と同様のことが書かれた箇所を本文中から抜き出せ（ルビは不要）。

　　［　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　］

問７　傍線部５「こまやかにしたためさせ」の解釈として最も適切なものを次の中から一つ選べ。

Ａ　いろいろと配慮して準備をさせて

Ｂ　たくさんの種類のものを用意させて

Ｃ　問題が起こらないよう処理をさせて

Ｄ　小さな文字で手紙を書かせて

Ｅ　注意をして取り調べをさせて

◎問８　次のＡ～Ｆのうち、本文の内容と合致ものを一つ選べ。

Ａ　芭蕉は十四日には、澄み渡った月を見ながら亭主と酒を酌み交わした。

Ｂ　夜の気比神宮は神々しく、月光が木々のあいだから漏れ差し込んでいた。

Ｃ　気比神宮の社の前には、白い真砂が敷き詰められていた。

Ｄ　遊行二世の上人は、自らの願い事をかなえるために気比明神に奉仕した。

Ｅ　芭蕉一行は亭主の勧めに従い、船を出して種の濱に立ち寄った。

Ｆ　種の濱には、わずかばかりの漁師の家とわびしい寺しかなかった。

問９　次の中から松尾芭蕉の作品を一つ選べ。

　　Ａ　古事記伝　　Ｂ　野ざらし紀行　　Ｃ　方丈記

　　Ｄ　山家集　　　Ｅ　病床六尺　　　　Ｆ　おらが春

【確認問題】

１　波線部ａより前の部分から、「月」と同じ季節を表す言葉を抜き出せ。

　（　　　　　　　　）

２　波線部ｂ～ｄの助動詞の文法的意味と活用形を答えよ。

　ｂ（　　　　　）・（　　　　形）

　ｃ（　　　　　）・（　　　　形）

　ｄ（　　　　　）・（　　　　形）

３　二重傍線部Ａの敬語の説明を次から選び、誰から誰に対する敬意かを答えよ。

ア　尊敬語・本動詞

イ　尊敬語・補助動詞

ウ　謙譲語・本動詞

エ　謙譲語・補助動詞

オ　丁寧語・本動詞

カ　丁寧語・補助動詞

記号〔　　　〕

（　　　　　　）から（　　　　　　）

４　次の各句の季語と季節を答えよ。

①　海暮れて鴨の声ほのかに白し

季語（　　　　　　）・季節（　　　）

②　五月雨の降り残してや光堂

季語（　　　　　　）・季節（　　　）

③　梅が香にのつと日の出る山路かな

季語（　　　　　　）・季節（　　　）

④　芭蕉野分して盥に雨を聞く夜かな

季語（　　　　　　）・季節（　　　）

【補充問題】

５　芭蕉は、「十五日」にはどこにいたと考えられるか、本文中から五字以内で抜き出せ。

　（　　　　　　　　　　　）

６　二重傍線部Ｂ「感」とは具体的にはどのようなものか。最も適当なものを次から選べ。

　ア　感 イ　既視感

　ウ　満足感　　エ　絶望感

【解答】

問１　Ｄ

問２　Ｃ

問３　Ｅ

問４　季語＝月（清し）　季節＝秋

問５　Ｄ

問６　越路の習ひ、なほ明夜の陰晴はかりがたし

問７　Ａ

問８　Ｅ

問９　Ｂ

【確認問題】

１　初雁

２　ｂ＝受身・連用　ｃ＝比況・終止　ｄ＝意志・終止

３　カ・亭主（あるじ）・作者（松尾芭蕉）

４　①＝鴨・冬　　　②＝五月雨・夏

　　③＝梅が香・春　④＝野分・秋

【補充問題】

５　敦賀の津

６　ア

【現代語訳】

　（歩いているうち、）しだいに白根が嶺が隠れて、比那が嶺が現れる。浅水の橋を渡って、（歌枕の）玉江（ではそ）の葦は穂先に実を結んでいた。鶯の関を過ぎて湯尾峠を越えると、燧が城（があり）、帰山で初雁（の声）を聞いて、十四日の夕暮れに敦賀の渡し場で宿を探す。その夜、月がとりわけ晴れている。「明日の夜もこのようであるだろうか（＝今晩のような月が見られるだろうか）」と言うと、「越路の決まりでは、やはり明日の夜の天候は予測しにくい」と、（宿の）亭主に酒をすすめられて、気比の明神に夜間参拝をする。仲哀天皇の御廟である。神社の前は神々しい様子をしていて、松の木の間に月（の光）が漏れて入っている、御前の白砂はまるで霜を敷いているようである。「昔、遊行二世の上人が大願発起をして、自分で草を刈り、土石を運び泥や水溜まりを乾かせて、参詣のための行き来が困らなくなった。（この）古い例が今にも途切れず、（代々の遊行上人は）神前に真砂を運びなさる。このことを遊行の砂持と申しています」と、（宿の）亭主が語った。

　秋の月の光が清らかだ。代々の遊行上人が運んだという砂の上を、澄みきった光が照らしている。

十五日、亭主の言葉にまちがいなく雨が降る。

　今晩こそ中秋の名月であると楽しみにしていたのに（、雨が降っている）。北国の天気は変わりやすいものだなあ。

　十六日、空が晴れたので、ますほの小貝を拾おうと、種の濱に舟を走らせる。海の上を七里（＝二八キロメートル）走る。天屋何某という者が、弁当箱や水筒などをいろいろと配慮して準備をさせて、舟乗りを多く舟に乗せて、追い風の時の間に吹いて到着した。（種の）濱はみすぼらしい海士の小さな家（があるところ）であって、もの寂しい法華（宗の）寺がある。ここで茶を飲み酒を温めたが、夕暮れの寂しさは感動ものであった。